

「ミニユーティーカフェは、地域の人々が気軽に集まり、お茶を飲みながらおしゃべりできる居場所のことで、全国に広がっている。自宅や公民館、空き店舗などに開設し、子育てや高齢者の生きがい作りなどの課題を取り組んでいる。運営はボランティアが中心だ。2人は、吹田市の公営団地に

白宅や空き店舗で
「ミニユーティーカフェは、地域の人々が気軽に集まり、お茶を飲みながらおしゃべりできる居場所のことで、全国に広がっている。自宅や公民館、空き店舗などに開設し、子育てや高齢者の生きがい作りなどの課題を取り組んでいる。運営はボランティアが中心だ。

なか、シニアが世代を超えて交流できる場「ミニユーティーカフェ」を作る動きが広がっている。関心を持つ女性2人が、大阪・千里ニュータウンにあるカフェを訪ねた。

探検隊員は大阪府吹田市の杉山昌美さん(67)と兵庫県芦屋市の畠和子さん(74)。街開きから50年がたち高齢化が進む同ニュータウンに住む杉山さんは、お年寄りを訪ねて会話するボランティアを務めながら、孤立を感じている。ホームヘルパーとして働く畠さんも「高齢者が近所の人たちと接する場があれば」と言う。

シニア探検隊

「ミニユーティーカフェ

ある「佐竹台サロン」を見学した。2009年4月、老朽化による団地の建て替えを機に、団地の自治会や佐竹台老人クラブ連合会などが協力して開設した。団地1階の集会室を利用。

テラスには「一寸休憩。お気軽」にと書かれたのぼりが立ち、内装は明るい。平日の正午から午後4時までボランティア約30人が交代で常駐、100円でコーヒー、紅茶が飲める。26席は

台地区連合自治会長の谷川一三さん(78)に「費用面はどうして

「集会室は団地の自治会が管理しているので場所代は必要ありません。家具や家電、備品などは寄付や大阪府などの助成でそろえ材料費などの経費は自治会とカフェの売り上げで負担します」と説明する。利用者が、折り紙やカラオケの教室を催したり、周辺の道を花壇で飾ったりして手伝っていると聞き、畠さんは「自然に協力の輪が広がる、うまく運営が続きますね」。

主婦を中心としたボランティア20人が交代で、水曜を除く毎日午前11時から午後4時まで、飲み物(200円)や手作りの日替わりランチ(500円)などを出す。2階建てで32人入る店内は、学校帰りの子どもや親子連れ、お年寄りでにぎやか



「さたけん家」で食事をする杉山さん(右奥)と畠さん(右手前)。案内した谷川さん(左奥)、水木さん(左手前)と話が弾む(大阪府吹田市で)

設立法の手引書も

コミュニティーカフェ作りを進めている公益社団法人・長寿社会文化協会(東京、03・5405・1501)が組織する「コミュニティーカフェ全国連絡会」(<http://blog.canpan.info/com-cafe/>)には全国の約1500か所のカフェが加入。ほぼ毎日利用でき、シニアが同世代や世代間交流の場を作る例も多い。同協会は手引書「コミュニティ・カフェをつくりよう!」(学陽書房)をまとめ、カフェの設立方法や実例を紹介している。

大阪市阿倍野区でカフェ「エフ・エーさん」と「よってこサロン」を運営するNPO法人・エフ・エー(06・6627・1977)は、大阪府内のカフェの連絡会の事務局も務める。現在42か所が加入。社会福祉協議会などと共に、カフェの開設やスタッフ活動の講座を開き、体験実習も行っている。

協力得て運営

次に訪問したのは「さたけん家」(06・6871・7557)。

次に訪問したのは「さたけん

コミュニティーカフェ作りのポイント



- ① 自宅を開放するのが費用がかからず最も簡単
- ② 仲間と複数で始めると、相談できて不安が少ない
- ③ 高齢者支援、世代間交流、子育て支援など、どんな活動をしたいか明確にする
- ④ 運営のイメージを決める。飲食をどの程度提供するか、ボランティアでまかなうか、家賃と人件費をかけるかなどを考えると、具体的な計画の方向が見えてくる

(長寿社会文化協会のホームページから)

シニア探検隊募集

あなたもシニア探検隊に参加しませんか。日々の暮らしの中で「こんなことを調べてみたい」と思っている対象を記者と一緒に取材するシニア世代を募集しています。希望者は、はがきに住所、氏名、年齢、電話番号と、「探検」としてみたい対象を記述のうえ、〒530-8551(住所不要)読売新聞大阪本社・編集委員室まで。隊員になつてもう方には、こちらから連絡します。

こちらは「佐竹台サロン」と「親だ。畠さんは食事を取りながら子」のような関係だ。子育て中の水木千代美さん(44)が有志を募って企画。昨年9月、商店が集まる近隣センター内にオープンした。水木さんは「地域の子

が「地域に活気が戻れば」とでもたちの通学の安全を守るために、谷川さんを始め自治会の支援を得ました。そこから、佐竹台にもう1か所、特徴の違うカフェを作ろうという機運が高まっています」と説明する。

主婦を中心としたボランティア20人が交代で、水曜を除く毎日午前11時から午後4時まで、飲み物(200円)や手作りの日替わりランチ(500円)などを出す。2階建てで32人入る店内は、学校帰りの子どもや親子連れ、お年寄りでにぎやか

煙さんは「私も地元で集いの場を作れたら」と刺激を受け、杉山さんは「近くなのでカフェに来て語らい、私にできるアイデアを考えたい」と話していた。(文・満田育子、写真・奥村宗洋)